



久保谷のあいぞうさん

昔々、久保谷にあいぞうという若者がいました。あいぞうは若い者に似合わず信心者でした。

ある寒い日でありました。あいぞうは今日は弥谷寺へお参りしようと思いい立ちました。弥谷寺はあいぞうの住んでいる久保谷の上にある山でありました。家から出てしばらく行くと大きな池がありました。その池に二羽の鶴が凍えそうでありました。「これは可愛そうなこっちゃん」と言って、二羽の鶴を捕ってきました。そして腰の帯にくくりつけました。どんどん歩いて行く内に日が射して暖かくなりました。凍えそうになっていた鶴が生き返りました。そして、飛び立とうとしました。すると鶴が飛び立つとあいぞうの体も一緒に飛んで行きました。あいぞうが「こらえてくれ。こらえてくれ」と言いましたが、そのまま空高く西へ西へと飛んで行きました。

そして、伊予の国（愛媛県）の金山まで飛んで、金山の松の木にあいぞうは、引っかかりました。鶴はそのまま飛んで行きました。帯を解いて降りようとしませんが、村の人が大勢よってきました。「こりゃ、天神が降りとるぞ、おーこ持って叩き殺せ」と口々に言いながら集まってきました。あいぞうは恐ろしくなりました。何とか言い逃れをしなければならぬと殺されてしまいます。しかし、松の木がとても高いので村の衆はわいわいと騒ぐばかりでした。あいぞうは、「わしは天神じゃないぞ、鶴に飛ばされてきたんじゃきに助けてくれ」と言いました。村の衆はなるほどよく見ると、天神じゃなくて、人間のようである。なるほど村の衆は木に登りあいぞうを助けました。あいぞうは、「わしの国は讃岐じゃが、遠いけに帰ることもできん。何ぞ仕事をして口すぎでもするけに」と言いました。村の人は「はいだら、金山の山掘り人夫になれや」ということで山掘りになりました。

ある日のこと、あいぞうは金を掘っていましたが、いつもより仕事がかどり先へ先へと掘って行きました。どんどん進んで行きますとぽかっと土があいてどこかの家の庭に出てきました。

そこは、大阪の道頓堀にある傘屋の庭でした。傘屋はびっくりしました。

「おい、おんごろもちかと思つたら人間が出てきたわい、えらいこっちゃ」と言つて大騒ぎになりました。あいぞうをつかまえて「こら、おまえはどこから来たか」「わしは讃岐の者じゃが、伊予の金山からここまで掘つてきたわい」と言いました。「それでは、家の傘番かさばんになつてくれ。人がのうてこまつていたところじゃ」と言つて、あいぞうはどうとう道頓堀の傘屋の傘番になりました。

ある風の吹く日に傘番をしていました。庭一面に傘を干していました。その番をするのがあいぞうの役目でありました。傘が風の吹くにつれてあちこちへころころ、こつちへころころと転がります。あいぞうが転がっている傘を掴つかんであるとき急に大きな風が吹いてきました。あいぞうは傘を持ったまま吹き飛ばされてしまいました。あいぞうは西へ西へと飛ばされてしまいました。

山を越え野を越え海の上を飛んで、じゅんじゅん飛んで行く内に普通寺の五重の塔にひっかりました。五重の塔のつべんに傘を持ったまま、ひっかかったので下の者は大騒ぎです。お寺の坊さんも町の人も出てきて、「おおい、塔の上に小野の道風がおるぞ」「傘をさしとるけに、小野の道風にちがいないぞ」と言っていました。そこであいぞうは「わしは、久保谷のあいぞうじゃ、たすけてくれや」と大声で叫びました。

そこで、お寺の人が、お寺にある全部の布団をみんな持つてきました。五重の塔の下に布団を山ほど積んで、まだその上に綿とフクチをいっぱい積みました。もうこれだけ積みれば大丈夫だと思い、「あいぞうや、飛んでみる」と言いました。あいぞうは飛び降りますと、あいぞうの目から火がでてフクチに燃え移りました。それから大火事になって塔は焼けてしまいました。今残っている塔は後から建てたものと言います。



久保谷から津嶋神社を撮影